

児童へのプログラミング教育

学生、授業支援へ着々

福井高専で準備講習

2020年から小学校で必修化されるプログラミング教育に向け、県内のIT業者でつくる「PCN（プログラミング・クラブ・ネットワーク）」などは、本年度、モデル事業に取り組んでいる。小学校での授業のサポート役を福井高専生が務める仕組みで、20日には鯖江市の同高専で学生を対象とした準備講習が開かれた。モデル事業は総務省の「若年層に対するプログラミング教育の普及推進」事業の採択を受け実施。8月に同市神明、鯖江東の両小で実証授業を行う予定で、同高専電子情報工学科2年生約40人がサポート役を務める。福井新聞社も取り組みの発信に協力している。

PCNメンバーの指導の下、今月から同高専での準備講習を進めており、この日は授業で使う手のひらサイズの子ども向けコンピューター「イチゴジャム」を活用し、川下りゲームや光センサーを利用した眼鏡拭きロボットを作動させるプログラミング方法を確認した。鯖江東小の畑中泉校

長も訪れ「児童に指導しすぎず、試行錯誤する楽しさも教えてほしい」なども教え方について助言。学生たちは真剣な表情で耳を傾けていた。今後、教員向けの講習も行う予定で、PCNの国で展開できるようにしたい」と話した。松田優一代表「福井市」法を構築したい」と話した。鯖江東小の畑中泉校

（桑野真吾）



「イチゴジャム」を使ってプログラミングに取り組む学生たち＝20日、鯖江市の福井高専